

斎藤徳元 三回

伊藤浩睦

寛永十年（一六三一年）に、松永貞徳一門は「犬子集」を発刊します。当時の俳諧は、連歌の席の座興から始まり、庶民の間で人気が出て、所詮は連歌をやるだけの学力の無い町人の遊びと軽く見られていました。「犬子集」は、その俳諧を一つの文芸として世間に認めさせようと企画された句集であり、俳諧の歴史の中で重要な位置を占めています。その巻頭句に斎藤徳元の句が採用されます。

春立や日本めでたき門の松

句集は、古今集以来の約束に従って、春夏秋冬の順に句が並べられます。さらに時候の早い順に並べますから、春の中では大抵は立春の句が最初に来ます。立春の句は皆が作っている、作り手の格や立場で誰の句を巻頭にするかを決めます。順当に行けば、貞門の総帥である松永貞徳です。「犬子集」の編集作業を担当した松江重頼の句が来ても不思議ではないのですが、徳元の句が来ます。

当時の徳元は、俳諧でも古老と言えるような立場にあった上に、過去に大名並みの官位を持ち、豊臣姓を下賜されていて、宮様や公家、大名とも交友がありました。庶民の文芸に箔を付けるには、その存在は、貴重で重要なものだったので

採用された句の数も、貞徳と重頼の次に多いので、看板として巻頭に据えただけでなく、俳人としての実力も認められていました。寛永六年（一六二七年）に徳元は江戸に移っている、ので、「犬子集」の編纂には関与していません。本人不在で重頼が選んで載せるかたちになりました。

寛永六年の江戸行きですが、そのとき徳元は七十一歳になっていました。その歳でどうして住み慣れた京都を出て江戸に行ったのか。徳元は、かねてから武家の新興都市である江戸で俳諧を広めたいとの気持ちがありました。しかし、智仁

親王との友誼を思うと京都を離れ難く移住を伸ばしていた。それが、智仁親王が亡くなったので、京極家の文事応接役も辞して江戸へ下ったのだと思われます。

当時の江戸は、地方から出て来た人達が集まった町であり、町人の間では文芸を楽しもうとする感覚に乏しく、職業俳諧師の営業が成立しないところがありました。しかし、徳元の場合には、連歌を通じての大名との交友がありますから、俳諧師の営業が上手く行かなくても、連歌の席に出ることによって食べて行くことくらいは出来ました。

江戸での徳元は、盛大に一門を起こすところまでは行かず、限られた俳人を指導するところに留まります。京都にいた頃は京極家から知行が出ていたこともあり、弟子を育てるといったことはやっていなくて、江戸でも名のある弟子は育てていません。

職業俳諧師は、自分の権威付けのために師匠を偉大な存在であったかのように宣伝します。後の松尾芭蕉にはそういう弟子が多くいて、より高く大きく持ち上げられたのですが、職業俳諧師の弟子を持たなかった徳元は、死後に持ち上げて宣伝してくれる人がいなかったため、江戸での俳諧の先達的な存在にも関わらず、その名は早いうちに忘れられてしまいました。